

「難破した水夫の物語」の 65 行 8 番目の文字の判読案*

永井 正勝[†]

キーワード： 中エジプト語、パピルス写本、神官文字、翻字

1 はじめに

「難破した水夫の物語」と称される中エジプト語のパピルス写本はパピルスのほぼ全体が残っており、その筆跡は明瞭である。加えて物語の内容は明快で、使用されている構文も分かり易い。このようなことからこの写本はエジプト学を志す多くの者が 1 度は通読していると思われるほどに有名な作品である。

ところが、この写本において文字の判読という基礎的な作業で見解の一致が見られない個所があるという事実について、今日のエジプト学で十分に認知されているようには思われない。だが、文字の判読を巡る見解の相違がしばしば語や形態素の認定の違いにも繋がっていくことを考えると、原資料に対する文字の判読の違いは看過し得ない事項だと言える。このような問題意識のもと、筆者はかつて本写本の 179 行目 5 番目の文字に対する判読案を提示した (永井 2009)。本稿では 65 行目 8 番目の文字について検討し、判読案を提示する¹。

*本稿は 2009 年筑波大学学位 (言語学) 請求論文「「エルミタージュ・パピルス No.1115」の文献言語学的研究—古書体学的分析と文字素論的分析—」の第 7 章に加筆・訂正を加えたものである。

[†]筑波大学大学院人文社会科学研究所一貫制博士課程

¹なお、以下の議論では文字の個所を示す際に「L065-Let08」などの略号を使用する。L065-Let08 は「65 行目 8 番目の文字」を示す。

2 従来の学説の検討

2.1 エジプト学における「資料」の扱い

古代エジプト中王国時代の文書は聖刻文字と神官文字という 2 種類の文字のどちらかで書かれた。聖刻文字は「山」や「鳥」などの形状を象形の原理で表現したものであり、この文字を学習したことのない現代の我々が文字を見ても、それが何をかたどっているのかを理解することがおおむね可能である。それに対して、神官文字はインクを利用して筆書きされる筆記体であり、その字形を見て、元となった象形対象を言い当てることは難しい場合が多い。聖刻文字と神官文字は同時代に共存していたが、両者は別々の文字体系を成しており、文書のジャンルによって使い分けられていた。たとえば王室の歴史碑文を石材に表現する際には聖刻文字が使用され、文学作品や行政記録の場合には神官文字が使用されていた。このように、聖刻文字と神官文字は互いに異なる存在であり、文学作品が聖刻文字で書かれることはなく、また反対に壁面の歴史碑文が神官文字で書かれることもなかった。

ところがエジプト学では神官文字で書かれた資料を神官文字のままですべて提示するのではなく、それを聖刻文字に翻字²することが一般的に行われている³。その結果、原資料が神官文字で書かれているにもかかわらず、聖刻文字に翻字されたテキストを資料として研究を進めることがエジプト学では常態となっている⁴。

神官文字を聖刻文字に改める作業は文字の判読という研究者による解釈を伴うものである。その結果として作成される翻字テキストは、したがっ

²ある文字体系の文字を他の文字体系の文字に書き換える作業、あるいは書き換えられたものを翻字 (transliteration) と呼ぶ。なお、翻字においては原資料の文字と翻字されたテキストの文字との間に 1 対 1 の対応が求められる (Coulmas 1996: 510-512)。

³『中エジプト語の資料―第 1 巻 神官文字で書かれた文学資料― (Middle Egyptian texts. Volume 1. Literary texts in the hieratic script)』とのタイトルを持つ Zonhoven (2001) に掲載されている資料はすべて聖刻文字に翻字されたテキストとなっており、神官文字は 1 文字も掲載されていない。

⁴中王国時代の文学作品の翻訳集である Quirke (2004) や中エジプト語文学に関する研究書の Parkinson (2002: 299) では、「難破した水夫の物語」の底本として翻字テキストの Blackman (1932) を示している。また、「難破した水夫の物語」の文体構造を研究した Burkard (1993: 44) はその底本に Foster (1988) が作成した翻字テキストを用いている。

て、二次的な加工物として位置づけられる。「難破した水夫の物語」のように有名な資料でありながら判読結果の違いが俎上に載せられてこないのは、二次的な加工物である翻字テキストを資料(底本)として研究を進めていることに起因する⁵。

2.2 L065-Let08 に対する学説の違い

L065-Let08 の翻字には、学史上、2つの見解が並立している。2種類の判読結果を文字コード⁶と聖刻文字の翻字⁷で示したものが(1)である。

(1) L065-Let08 を巡る 2つの見解

- a. 「D3」𐤃として判読する
- b. 「D13+Z4」𐤃𐤆として判読する

(1a)はL065-Let08を1字節としてみなし⁸、「D3」として判読するものである。D3は「髪」をかたどった文字である。

それに対して(1b)の見解はL065-Let08を2字節とみなし、「D13+Z4」として判読するものである。D13は「眉毛」をかたどった文字である。またZ4は2本の斜線をかたどった文字である。

このように、(1a)と(1b)の見解の違いは、判読した文字の種類が異なるばかりか、L065-Let08を1字節として判断するのか、あるいは2字節として判断するのかという字節数の違いにもなっている。加えて、両者の判読結果は、語の表記法と子音転写の違いにもなっている。

⁵神官文字の資料を聖刻文字に翻字する目的や意義についてエジプト学では十分な説明がなされていない。そこで、神官文字の資料が聖刻文字に翻字される理由を筆者なりに考えてみると、(a) 神官文字の判読結果を聖刻文字で示す、(b) 神官文字を読むことが出来ない人に便宜を図って聖刻文字に翻字したテキストを作成する、(c) エジプト学では伝統的に神官文字を聖刻文字の翻字するのが常態となっている、などのものが考えられる。だが、いずれの理由があるとしても、原資料の神官文字を読むという行為を考えたとき、聖刻文字に翻字された二次的な加工物が不要であることを指摘しておきたい。

⁶文字コードはGardiner (1957: 442-543) に依拠する。

⁷聖刻文字の翻字は神官文字と同じ右横書き(右から左に向かって書くもの)で表示する。

⁸「字節」は福盛・池田(2002)で提唱された用語であり、「形状として1まとまりをなしているもの」(福盛・池田 2002: 37)を指す。また漢字の部首など字節の構成要素は「字素」(福盛・池田 2002: 37)と呼ばれる。

L065-Let08 は *in(h)* 「眉毛」[男性名詞] に伴う文字である⁹。原資料においてこの語には 3 人称男性単数形の接尾代名詞¹⁰のうち、双数形の名詞に付加される=*f*「彼の」が後続しているため、*in(h)*は双数形として扱われる。この状況において(1a)の判読案は L065-Let08 を *in(h)* 「眉毛」の限定符とみなすとともに、男性名詞双数形の接辞 *wy* が *in(h)* に付加されていないとの見解に立つものである。

一方、(1b)の判読案では D13 が限定符となり、次の Z4 が男性名詞双数形の接辞 *wy* を示していることになる。更にこの場合、Z4 の機能に 2 つの解釈が得られる。その 1 つは、Z4 が *y* の音を示しているというものである。この *y* は男性名詞双数形接辞 *wy* の一部としてみなされる。一方、2 つ目の解釈は Z4 を双数形を示す限定符とみなすものである。この場合、限定符の存在によって接辞 *wy* の全体が示されているということになる。

以上の見解の違いは、次のように整理される。

(2) L065-Let08 の判読に由来する語の子音転写の違い

a. D3(限定符)と判読した場合の語の子音転写

in(h)(.wy) 「(双方の)眉毛」[双数形接尾辞がすべて省略されている]

b. D13(限定符)+Z4 と判読した場合の語の子音転写

① *in(h)(w)y* 「(双方の)眉毛」[双数形接尾辞の一部が音で表記されている]

② *in(h).wy* 「(双方の)眉毛」[双数形が限定符で示されている]

2.3 学説の確認

次に従来の研究が(1a)と(1b)のどちらの見解を採用しているのかを確認する。表 1 は L065-Let08 の翻字を出版年ごとに示したものである。

⁹当該箇所では *h* の文字が省略されているので *in(h)* としたが、たとえば Hannig (2003: 308) に見られるように、辞書における見出し語は *inh* となる。

¹⁰接尾代名詞 3 人称男性単数形の基本形は=*f* であるが、双数形の名詞に付加されるときに異形態の=*f*_y が用いられることがある。

表 1 : L065-Let08 に対する翻字の一覧

文献	翻字された文字		備考
	㊦ D3	㊦ D13+Z4	
Golénisheff (1906: 77)	+		
Erman (1906: 10)	+		
Gardiner (1908: 61)	+		翻字は一部のみ
Golénisheff (1912: 3)	+		
Golénisheff (1913: 3)	+		
Blackman (1932: 43)		+	
Vikentiev (1936: 17-23)	+		L065-Let98 の分析
de Buck (1941: 10)		+	
de Buck (1948: 101)		+	
Faulkner (1962: 23)		+	辞書
Foster (1988: 101)		+	
Zonhoven (1992: 227)		+	
Borghouts (1993: II, 256)		+	
Lapidus (1995: 75)		+	
Hoch (1996: 188)		+	翻字に省略あり
Foster (1998: 19)		+	翻字に省略あり
von Bomhard (1999: 60)	+		字形に関する研究
Graefe (2001: 41)		+	文法書での引用
Zonhoven (2001: 2)		+	
Chioffi & Le Guilloux (2003: 22)		+	
Le Guilloux (2005: 28)		+	
Ockinga (2005: 140)		+	翻字に省略あり
Schenkel (2005: 205)		+	文法書での引用

表 1 に示されているように、Golénisheff (1906) によって最初に翻字が公開されてからしばらくは D3 として判読されていた。だが、Blackman (1932)

の翻字が提示されて以降、Vikentiev (1936) や von Bomhard (1999) のような説があったものの、D13+Z4 の見解が支配的になっている。

では、Blackman (1932) 以降に支配的となった D13+Z4 の判読には、どのような根拠があるのだろうか。この判読案を最初に提示した Blackman (1932) はこの箇所に次のような注釈を付けている。

(3) R.S. Gleadow 氏と M.F. Laming Macadam 氏が私に指摘してくれたように、𐀓 とするのではなく、これが明らかに正しい翻字である。Möller, 前掲書, i, no.89 を参照。(Blackman 1932: 43a 一部省略)

この(3)において Blackman (1932) が「これ」と表現しているのは D13+Z4 を示す。また、Borghouts (1993) は次のように述べている。

(4) 他のエディションでは 𐀓 が限定符の 𐀓 として翻字されている。しかし、神官文字の 𐀓𐀓 の表記は 𐀓 を示す。(Borghouts 1993: II, 287)

管見に及んだ限り、L065-Let08 を D13+Z4 と判読する根拠や理由を示したものは、Blackman と Borghouts のみである。このうち Blackman の註釈には Möller (1909) の字形が根拠として示されているが、Borghouts の見解には明確な根拠が示されているとは言い難い。

その一方で、L065-Let08 を D3 と判読する根拠については、Vikentiev (1936) において明確に示されている¹¹。そこで4節において Vikentiev (1936) の掲げる根拠を紹介し、その妥当性について原資料の写真を参照しながら検討することにした。

¹¹Vikentiev (1936) 以降の研究で L065-Let08 を D3 に判読しているものは von Bomhard (1996) である。しかしながらこれは資料全体を翻字したものではなく、L065-Let08 の判読の根拠を示したものでもない。

3 資料の概要と写本調査

「難破した水夫の物語」は文学作品に与えられた通称であり、この資料の正式名称はエルミタージュ国立美術館所蔵の「パピルス・エルミタージュ No.1115 (Papyrus Hermitage No.1115)」である¹²。このパピルスは 1881 年に卷子本の状態でエルミタージュ国立美術館にて発見され、同年、学芸員の W. Golénisheff によって翻訳が公表された (Golénisheff 1881)。本写本は、書字方向と字形の特徴から中王国時代の第 12 王朝 (紀元前 1976-1793 年頃) に書写された資料だと推定される (Burkard & Heinz 2003; Parkinson 2002: 299)。また、字形の類似から、本写本を書写した書記が「プリス・パピルス (Papyrus Prisse)」をも書写していたと考えられている (Golénisheff 1913: 2; von Bomhard 1999: 51)。

本写本の神官文字の写真を掲載した唯一の刊行物は Golénisheff (1913) である。だが、これはモノクロ写真を掲載したものであり、文字の細部を確認しようとする場合、優れた資料だとは言い難い。そこで本稿の筆者はエルミタージュ国立美術館にて写本の調査を行い、写真撮影を行なった。

[パピルス写本調査]

実施日：2006 年 3 月 17 日

実施場所：エルミタージュ国立美術館

協力者：Dr. Andrey O. Bolshakov (エルミタージュ国立美術館学芸員)

加藤百合 (筑波大学准教授)

調査内容：パピルス写本の実見と写真撮影

以下、神官文字の検討を行なう際に、この調査によって得た写真を使用する。

¹²この作品は通称で示されることが多い。そこで本稿でも通称を用いている。

4 神官文字の検討

4.1 L065-Let08 の字形と Vikentiev 説の内容

図 1 は L065-Let08 の写真である。



図 1 : L065-Let08

この字形は、右上から左下に伸びる「線 A」と、線 A の下に見られる 2 本線の「線 B」に分けることができる。L065-Let08 を D3 とする見解において線 A と線 B を合わせたものが 1 字節となる。したがって、この場合には線 A と線 B はそれぞれ字素となる。また D13+Z4 とする説では線 A と線 B のそれぞれが 1 字節となる。

L065-Let08 が D3 であることを主張した唯一の論考の Vikentiev (1936) は、根拠として次の特徴を挙げている。

(5) Vikentiev (1936: 19-22) が示した主な根拠¹³

- a. 線 A の形状は No.89 の字形と一致しない。No.89 は左上から右下に書くが、線 A は右上から左下に書かれている。(Vikentiev 1936: 19-20, (1), (2))
- b. 線 B の形状は Z4 と異なる。(Vikentiev 1936: 21-22, (3), (4))
- c. 本写本において、接尾代名詞男性単数形=fj を伴う名詞に双数形接辞.wy が表記されることはない。(Vikentiev 1936: 22, (5))
- d. 63 行目¹⁴に L065-Let08 と同じ文字があり、こちらは D3 と判読され

¹³Vikentiev は根拠を(1)～(5)に分けて提示しているが、本稿ではそれを a～d にまとめなおして提示する。加えて Vikentiev が述べた根拠の内容を、本稿で設定した線 A・線 B の用語を使用して説明する。

¹⁴なお、Vikentiev (1936: 22) は「53 行目」と述べているが、これは単純なミスで、正しくは 63 行目である。

ている。(Vikentiev 1936: 22, (5))

この Vikentiev の指摘を参考に、4.2～4.5 において原資料の字形と用例を確認する。













4.2 検証 1: Möller の字形リストとの照合

神官文字の字形リストの基本書は Möller (1909) である。Blackman (1932) も L065-Let08 の判読の根拠として Möller (1909) の No.89 を挙げていた。そこで最初に L065-Let08 を Möller (1909) の字形リストと照合させてみたい。

Möller (1909) の字形リストでは独自の文字コードが与えられており、それは本稿で依拠した Gardiner (1957) 式の文字コードと異なっている。そこで最初にその対応を示しておく、No. 81 (Möller) = D3 (Gardiner)、No. 89 (Möller) = D13 (Gardiner) となる。

表 2 は Möller の字形リストの No.81 と No.89 である。

表 2: Möller (1909) による神官文字リスト (No.81[上段]と No.89[下段])

Hierogl.	Abstr.	Elephantine	Matruh	Prisse	Hahn	Sinuhe	Bulaq 18	Math.	Westcar	Helen.	Ebers
81.											
	Spr. 5.	Abessin. 1/2 Bulwin		8, 10.	Gr. Kalk. V. 11 (M. 10.)	291. 63. Libanus			5, 16	3, 1	63, 14 45, 18
89.											
	Augen- Bäume.					58				6, 3	66, 2 103, 16.

Möller の No.81[上段]では、線 A が右上から左下に向かっている。それに対して No.89[下段]では原則として、線 A が平行であるか、あるいはやや右下がりになる。

ここで図 1 の線 A のみに着目して No.89 を見てみると、同一だと思われる形状を認めることができない。むしろ、線 A と線 B を合わせた図 1 の字形の全体が No.81 の「プリス・パピルス」(8,10) の例 (左から 4 番目の資

料¹⁵⁾と類似しているように思われる。3 節で述べたように「プリス・パピルス」の書記は「難破した水夫の物語」の書記と同一人物であると考えられており、「プリス・パピルス」の事例が No.81=D3 なのであれば、L065-Let08 も No.81=D3 として判読されてよいように思われる。

ところで、表 2 の No.89 で線 A が右上から左下に向かって書かれているのは「ベルリン・パピルス 3022 (Papyrus Berlin 3022)」の 1 例 (表 2 の左から 6 番目の資料) のみであり、これをもって L065-Let08 の線 A を No.89 とみなすことができるように思われるかもしれない。しかしながら Vikentiev (1936: 20-21) の指摘にあるように、「ベルリン・パピルス 3022」を研究した Gardiner はこの文字を D55 (=Möller No. 121) として判読しており、この個所を巡る Möller の判読結果をそのまま受け入れるわけにはいかない。実際、Gardiner 以外の翻字テキストを見ても、この文字は D55 と判読されている (Blackman 1932: 20; Koch 1990: 34)。そもそも Möller の No.89 のリストの中で、この「ベルリン・パピルス 3022」の 1 例のみ、線の方向や形状が他の事例と異なっている。それゆえ、これを D55 に変更するのであれば、No.89 の字形に統一性が得られることにもなる。このような理由により、本稿でもこの「ベルリン・パピルス 3022」の事例を D55 と判断することにしたい。

以上、Möller のリストを使用して L065-Let08 の字形の検討を行なったが、その字形を見る限り、Blackman (1932: 32a) が指摘していたような No.89 との類似点を見出すことができなかった。むしろこれを No.81=D3 として判断するのが妥当だと言える。

4.3 検証 2 : L065-Let08 の線 B

L065-Let08 を D13+Z4 と判読するということは、右上から左下に向かう線 A を D13 として解釈する一方で、2 本の斜線からなる線 B を Z4 として解釈することでもある。このうち、線 A の形状が D13 に成り得ないことを 4.2 で論じたが、4.3 では線 B の形状を Z4 と比較してみたい。

¹⁵⁾Möller (1909) の表では左端に見出しとして「文字番号」と「対応する聖刻文字」が掲載され、その後に 11 種類の資料が左から右に向かって年代順に配列されている。「左から 4 番目の資料」とは、見出しを除く資料部分の 4 番目を指す。

図 2 は L065-Let08 を含む「彼の双方の眉毛」の神官文字表記である。上側の矢印が L065-Let08 の線 B を、下側の矢印が L065-Let10 の Z4 を指す。この 2 つを比較すればわかるように、L065-Let08 の線 B は Z4 よりも太く書かれているように思われる。

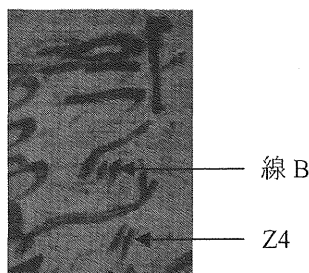


図 2 : 「彼の双方の眉毛」(65 行目) の神官文字

Vikentiev (1936: 21-22) によれば、Z4 の字形においては①左側の斜線の方が右側の斜線よりも高い位置に書かれる、② 2 本の斜線が平行になるか、あるいはジグザク状になる、という特徴がある。図 2 の線 B を見ると、右側の線の位置が高いわけではなく、2 本の斜線が明瞭に平行になっているとは言い難いように思われる。また図 2 の Z4 は、その前の文字とある程度の間隔を保ちつつ、行の中央に表記されている。それに対して線 B は線 A に近く、なおかつ位置も行の左側に寄っている。

以上の点を考えると、L065-Let08 の線 B を Z4 と判断することは妥当ではないように思われる。

4.4 検証 3 : 男性名詞双数形の表記法

「難破した水夫の物語」では、65 行目を含め、男性名詞双数形が 6 例見られる。中エジプト語における男性名詞双数形の接辞は *wy* であり、子音転写ではこの形態素を語幹の後に表記する。神官文字の表記では幾つかの方法によって男性名詞双数形を示すことができる。「難破した水夫の物語」では次の 3 種類の方法が見られる。

(6) 「難破した水夫の物語」における双数形の表記法

a. 方法 1 : 限定符を 2 つ表記する (1 例)

rd.wy 「両足」D21(*r*)-D46(*d*)-D56-(限)-D56(限) [L045-Let13~L046-Let02]

b. 方法 2 : 接辞 *wy* を表音文字で表記する (3 例)

ɕ.wy 「両腕」D36(ɣ)-Z1(限)-G43(*w*)-Z4(*y*) [L054-Let06~L054-Let09]

ɕ.wy 「両腕」D36(ɣ)-Z1(限)-G43(*w*)-Z4(*y*) [L161-Let15~L161-Let18]

ɕ.wy 「両腕」D36(ɣ)-Z1(限)-G43(*w*)-Z4(*y*)-M17*2(*y*) [L087-Let05~L087-Let09]

c. 方法 3 : 接尾代名詞 3 人称男性単数形の=*fy* が付加される場合には接辞 *wy* の表記を省略する (1 例)

gs(.wy)=fy 「その両端」Aa16(*gs*)-Z1(限)-I09(*f*)-Z4(*y*) [L085-Let09~L085-Let12]

L065-Let05~L065-Let08 の *in(h)* 「眉毛」の場合、次に 3 人称男性単数形の接尾代名詞=*fy* 「彼の」が続いている。だとすれば、この *in(h)* 「眉毛」においても、方法 3 が採用されているものと考えることが可能である。この判断を支持するためには、(2a)に示したように、L065-Let08 を D3 と判読することが必要となる。

Vikentiev の指摘の(5c)にあるように、「難破した水夫の物語」の男性名詞双数形の表記法を考えると、L065-Let08 を D3 と判読するのが妥当だと言える。

4.5 検証 4 : 「難破した水夫の物語」における D3 の例

「難破した水夫の物語」では L065-Let08 以外に D13 であると判読される文字は存在していない。それに対して D3 と判読することのできる文字は他に 1 つ認められる。その箇所は L063-Let09 であり、この文字は *hbsw.t* 「髭」の語の限定符として使用されたものである。図 3 は L063-Let09 の写真である。



図 3 : L063-Let09

表 1 に掲載した文献のうち、この箇所を掲載していない Gardiner (1908)、Faulkner (1962)、von Bomhard (1999) を除き、この箇所を掲載しているすべての研究者が L063-Let09 を D3 と判読しているし、管見に及んだ限りこの L063-Let09 を D13 として判読している研究例は 1 つも存在していない¹⁶。

本稿の筆者は L063-Let09 と L065-Let08 が同じ種類の文字であると考えており、したがって L063-Let09 が D3 であるならば、L065-Let08 も D3 と判読されることになる。

4.6 小結

以上、「難破した水夫の物語」の原資料を確認した結果、L065-Let08 を D13+Z4 と判読する積極的な根拠は得られなかった。むしろ、L065-Let08 は「プリス・パピルス」(8,10) の事例や L063-Let09 と同様に D3 であると考えられる。

5 「エドウィン・スミス・パピルス」における *inh* 「眉毛」の語の限定符

4 節における字形の検討によって L065-Let08 を D3 として判読する根拠が得られたと思う。更に本節では神官文字の写真が刊行されている「エドウィン・スミス・パピルス (Edwin Smith Papyrus)」(Allen 2005) を用いて *inh* 「眉毛」の語の表記を確認し、本稿の見解の妥当性を補強することにした。

「エドウィン・スミス・パピルス」では 3,11 と 4,2 の 2 箇所に *inh* が書

¹⁶表 1 に掲載した文献以外では、Sethe (1907: 83) と Dévaud (1917: 197) が L063-Let09 を D3 と判読している。

かれている (図 4)。

3,11 (図 4a) の限定符は D13+D13+Z4 であり、D13 は太い線でおおよそ平行に書かれている¹⁷。それに対して 4,2 (図 4b) の限定符は D3+D3+Z4 であり、こちらは右上から左下に向かう細い線で書かれている。これらの限定符の字形は、それぞれ Möller (1909) の No. 89 と No.81 として判読される。



a : 3,11 の *inh* の表記



b : 4,2 の *inh* の表記

図 4 : 「エドウィン・スミス・パピルス」における *inh* 「眉毛」の表記

このように「エドウィン・スミス・パピルス」では *inh* 「眉毛」の語の限定符に D13+D13+Z4 と D3+D3+Z4 の 2 種類が見られるが、D13 と D3 の字形の差は明瞭である。D13 の字形は線が水平に近く、右端が下に向いている。それに対して D3 の字形は線が右上がりとなる。「難破した水夫の物語」の L065-Let08 の字形は線 A が右上がりとなっており、「エドウィン・スミス・パピルス」の事例と対比させると、D3 に近いように思われる。

6 結論

「難破した水夫の物語」の 65 行目 8 番目の文字は、Golénisheff (1906) によって最初に翻字が公開されてから、しばらくは D3 として判読されていた。だが、Blackman (1932) の翻字が提示されて以降は、Vikentiev (1936) による卓越した論考が提示されていたにもかかわらず、原資料全体の翻字テキストを作成したすべての研究者がこれを D13+Z4 と判読してきた。このような状況において、本稿では原資料の文字を検討することにより 65 行目 8 番目の文字を D3 と判読するという見解に至った。この見解が正しいのであれば、Blackman (1932) 以降 75 年以上も支配的であった判読案に訂正が求められることになる。

¹⁷(2b)に示したように Z4 は接辞か限定符のどちらかである。ここでは便宜的に限定符として捉えておく。

本稿の考察は原資料の中の 1 文字を判読したものだが、これにより、分析した文字を含む語の子音転写が *in(h)(.wy)* 「(双方の) 眉毛」となり、この語の表記においては男性名詞双数形の接辞 *wy* が省略されているとの判断を下すことができる。

【参考文献】

- Allen, James P. (2005) *The art of medicine in ancient Egypt. With an essay by David T. Mininberg, M.D.*. New York: The Metropolitan Museum of Art. New Haven-London: Yale University Press.
- Blackman, Aylward M. (1932) *Middle-Egyptians stories*. Bibliotheca Aegyptiaca II. Bruxelles: Édition de la fondation Égyptologique Reine Élisabeth.
- Borghouts, Joris F. (1993) *Egyptisch. Een inleiding in taal en schrift van het Middenrijk. I-II*. Leuven: Ex Oriente Lux Peeters.
- Burkard, Günter (1993) *Überlegungen zur Form der ägyptischen Literatur. Die Geschichte des Schiffbrüchigen als literarisches Kunstwerk*. Wiesbaden: Harrassowitz.
- Burkard, Günter and Heinz J. Thissen (2003) *Einführung in die altägyptische Literaturgeschichte I. Altes und Mittleres Reich*. Hamburg-London: LIT.
- Chioffi, Marco E. and Patrice Le Guilloux (2003) *Il racconto del naufrago. Le conte du naufragé*. Milano: Fondazione “Emilio Bernardelli”.
- Coulmas, Florian (1996) *The Blackwell encyclopedia of writing systems*. Oxford: Blackwell.
- de Buck, Adriaan (1941) *Egyptische leesboek. I. Teksten*. Leiden: Nederlandsche Institut voor het Nabije Oosten.
- de Buck, Adriaan (1948) *Egyptian reading book. Exercise and Middle Egyptian texts*. Chicago: Ares Publishers.
- Dévaud, Eugène (1917) ‘Le conte du naufragé’. *Recueil de travaux relatifs à la philologie et à l’archéologie Égyptiennes et Assyriennes* 38: 188-210.
- Erman, Adolf (1906) Die Geschichte des Schiffbrüchigen. *Zeitschrift für ägyptische Sprache* 43: 1-26.

- Faulkner, Raymond O. (1962) *A concise dictionary of Middle Egyptian*. Oxford: Griffith Institute.
- Foster, John L. (1988) “‘The Shipwrecked Sailor’”. Prose of verse ?’. *Studien zur altägyptischen Kultur* 15: 69-109.
- Foster, John L. (1998) *The Shipwrecked Sailor. A tale of ancient Egypt*. Cairo: The American University Press in Cairo.
- 福盛貴弘・池田潤 (2002) 「文字の分類案—一般文字学の構築を目指して—」『一般言語学論叢』 4・5: 33-56.
- Gardiner, Alan (1908) ‘Notes on the tale of Shipwrecked Sailor’. *Zeitschrift für ägyptische Sprache* 45: 60-66.
- Gardiner, Alan (1957) *Egyptian grammar. Being an introduction to the study of hieroglyphs*. Third edition, revised. Oxford: Griffith Institute.
- Golénisheff, Wladimir (1881) *Sur un ancien conte égyptien*. Notice lue au congrès des orientalistes. Berlin.
- Golénisheff, Wladimir (1906) ‘Le papyrus N° 1115 de l’Ermitage impérial de Saint-Petersbourg’. *Recueil de travaux relatifs a la philologie et a l’archéologie Égyptiennes et Assyriennes* 28: 73-112.
- Golénisheff, Wladimir (1912) *Le conte du naufragé*. Cairo: Imprimerie de l’institut Français.
- Golénisheff, Wladimir (1913) *Les papyrus hiératiques N°N° 1115, 1116A et 1116B de l’Ermitage impériale à St. Pétersbourg*. Kairo.
- Graefe, Erhart (2001) *Mittelägyptische Grammatik für Anfänger. 6., verbessert und teilweise veränderte Auflage uneter Mitarbeit von Jochem Kahl*. Weisbaden: Harrasowitz Verlag.
- Hannig, Reiner (2003) *Großes Handwörterbuch Ägyptisches-Deutsch. Die Sprache der Pharaonen (2800-950 v.Chr.)*. Marburger Editon. Mainz am Rhein: Philipp von Zabern.
- Hoch, James E. (1996) *Middle Egyptian grammar*. Mississauga: Benben Publications.
- Koch, Roland (1990) *Die Erzählung des Sinuhe*. Bibliotheca Aegyptiaca XVII. Brucelles: Édition de la fondation Égyptologique Reine Élisabeth.

- Lapidus, Michel (1995) *La quête de l'île merveilleuse (le conte du naufragé)*. Paris: La Maison de Vie.
- Le Guilloux, Patrice (2005) *Le conte du naufragé. Texte hiéroglyphique, translittération et traduction commentée*. Angers: Cahiers de l'association d'Égyptologie ISIS.
- Möller, Georg (1909) *Hieratische Paläographie. Die Aegyptische Buchschrift in ihrer Entwicklung von der fünften Dynastie bis zur Römischen Kaiserzeit. Band I. Bis zum Beginn der Achtzehnten Dynastie*. Leipzig: J.C.Hinrichs'sche Buchhandlung.
- 永井正勝 (2009) 「「難破した水夫の物語」の 179 行目 5 番目の文字の判読案」『言語学論叢一城生佰太郎教授退職記念論文集』特別号: 95-116.
- Ockinga, Boyo G. (2005) *Mittelägyptische Grundgrammatik*. Mainz am Rhein: Philipp von Zabern.
- Parkinson, Richard B. (2002) *Poetry and culture in Middle Kingdom Egypt. A dark side to perfection*. London-New York: Continuum.
- Quirke, Stephen (2004) *Egyptian literature 1800 BC. Questions and readings*. London: Golden House Publications.
- Schenkel, Wolfgang (2005) *Tübinger Einführung in die klassische-ägyptische Sprache und Schrift*. Tübingen: Pagina GmbH.
- Sethe, Kurt (1907) 'Bemerkungen zur »Geschichte des Schiffbrüchigen« (Im Anschluß an Ermans Bearbeitung dieses Textes in ÄZ.43.)'. *Zeitschrift für ägyptische Sprache* 44: 80-87.
- Vikentiev, Vladimir (1936) 'A propos des "sourcils" de roi serpent (Pap. Ermitage No.1115, col.65)'. *Bulletin of the Faculty of Arts* 4: 17-23.
- von Bomhard, Anne (1999) 'Le conte du naufragé et le papyrus Prisse'. *Revue d'Égyptologie* 50: 51-65.
- Zonhoven, Louis M. J. (1992) *Middel-Egyptische grammatica. Een praktische inleiding in de egyptische taal en het hiërogliefenschrift*. Leiden: CIP-Gegevens Koninklijke Bibliotheek, den Haag.
- Zonhoven, Louis M. J. (2001) *Middle Egyptian texts. Volume I. Literary texts in the hieratic script*. Leiden: Djehuty Publications.

On deciphering the 8th sign in the 65th line of *the Shipwrecked Sailor*

Masakatsu NAGAI

Since its first transliteration was made public by Golénisheff (1906), the eighth sign of the sixty-fifth line of *the Shipwrecked Sailor* was long deciphered as Gardiner's sign D3. However, since Blackman (1932) published his transliteration, and despite the outstanding discussion presented by Vikentiev (1936), all of the researchers who transliterated the entire text from the original source have deciphered it as D13 + Z4. Given this situation, through examination of the hieratic source text, this article has come to the conclusion that the eighth sign of line sixty-five should be deciphered as D3. If this opinion is correct, then it will require a correction of the predominant interpretation since Blackman, over 75 years ago.

Doctoral Program in Literature and Linguistics

University of Tsukuba

1-1-1 Tennodai, Tsukuba, Ibaraki 305-8571, Japan

E-mail: mntcabe@nifty.com.